

Inverted Papilloma の 3 例

市立札幌病院泌尿器科

斯 波 光 生
大 橋 伸 生
波 治 武 美
久 島 貞 一

同 中検病理

伊 藤 哲 夫

INVERTED PAPILLOMA: REPORT OF THREE CASES

Teruo SHIBA, Nobuo OHASHI, Takemi NAMIKI
and Teiichi HISAJIMA

From the Department of Urology, Sapporo City General Hospital, Sapporo

Tetsuo ITOH

From the Department of Pathology, Sapporo City General Hospital, Sapporo

Inverted papilloma was found at the vesical neck of 25-year-old man with hematuria, at the prostatic urethra of 44-year-old man with difficult urination and at the same site of 45-year-old man with interruption of micturition. On endoscopy these three tumors were pedunculated, rod-like, of smooth surface, and polyp-like with transparent capillaries. Histological proof was obtained on TUR-specimens. The first case was the youngest case ever reported.

膀胱の inverted papilloma は内視鏡的には膀胱の三角部ないし頸部から、表面が平滑で粘膜正常と思われる有茎性の、一見ポリープ様の腫瘍として認められ、病理組織学的には表面は正常の移行上皮で覆われ、その内部の間質に向かって乳頭状または樹枝状の細胞増殖がみられるという、一般の膀胱腫瘍の上皮増殖とはまったく逆の、内臓性の上皮増殖を示すきわめて特異な所見の腫瘍であり、1963年 Potts ら¹⁾の最初の報告以来47例、本邦でも稲田ら²⁾の第1例から9例³⁻⁷⁾の報告がみられる。われわれも、本症の3例を経験したので症例を追加する。

自 験 例

症例1: 25歳, 男.

初 診: 1976年2月7日.

主 訴: 肉眼的血尿.

現病歴: 初診前日突然2, 3回の無症候性の肉眼的血尿があり、当科を受診した.

初診時尿所見: 蛋白(-), 沈渣正常.

膀胱鏡所見: 膀胱頸部右側からと思われるクルミ大、有茎性の、表面には比較的平滑で毛細血管の走行も透視される、腫瘍というよりはむしろゴロッとした腫瘤状であったことから cystitis glandularis ないし本症を疑った.

IVP に異常はないが20分後の膀胱像および膀胱レリーフ造影で約2 cm の陰影欠損像をえた.

治療および経過: 2月12日, TUR により膀胱頸部7時よりの有茎性、多少凹凸のある表面比較的平滑な、一部分葉状で嚢胞状ないしポリープ状の部分もみられる3.5 g の腫瘤を切除、基部は焼灼した. 術後経過は良好で1年後の現在再発はない.

病理組織学的所見: 腫瘍表面は多少の切れこみはあるが正常の移行上皮で覆われ、粗な線維血管組織内に屈曲した上皮索が複雑に入りこんでいる. すなわち乳頭腫であれば間質を中心に上皮索が外方に突出するのに対して上皮索の周囲に間質があるという、まったく

逆の型を示すわけで腫瘍表面との関係を見逃すと乳頭腫と誤ってしまうし、また一部のみをみると Brun's cell nests とみられる (Fig. 1). 上皮索の強拡大では楕円形の核を有する上皮細胞は常に索にはほぼ垂直に配列しており、細胞の異型性、核分裂像、細胞浸潤像はみられない (Fig. 2).

症例 2 : 44歳, 男.

初 診 : 1973年 5月16日.

主 訴 : 軽度の排尿困難.

現病歴 : 数ヵ月来の上記症状で当科を受診.

初診時尿所見 : 蛋白(-), 赤血球 2~3 コ/HPF, 血球(-), 細菌(-), 潜血反応(+).

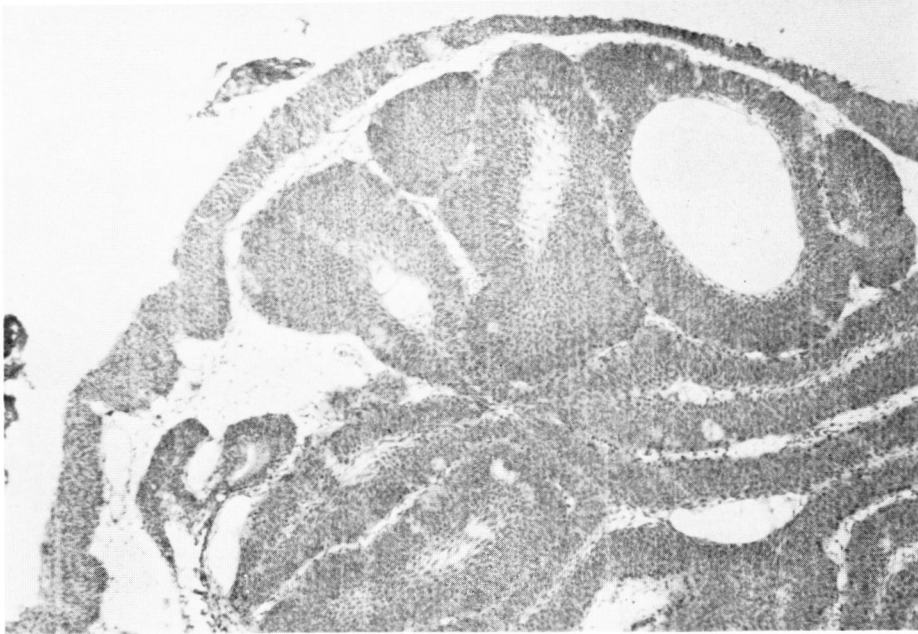


Fig. 1. 症 例 1

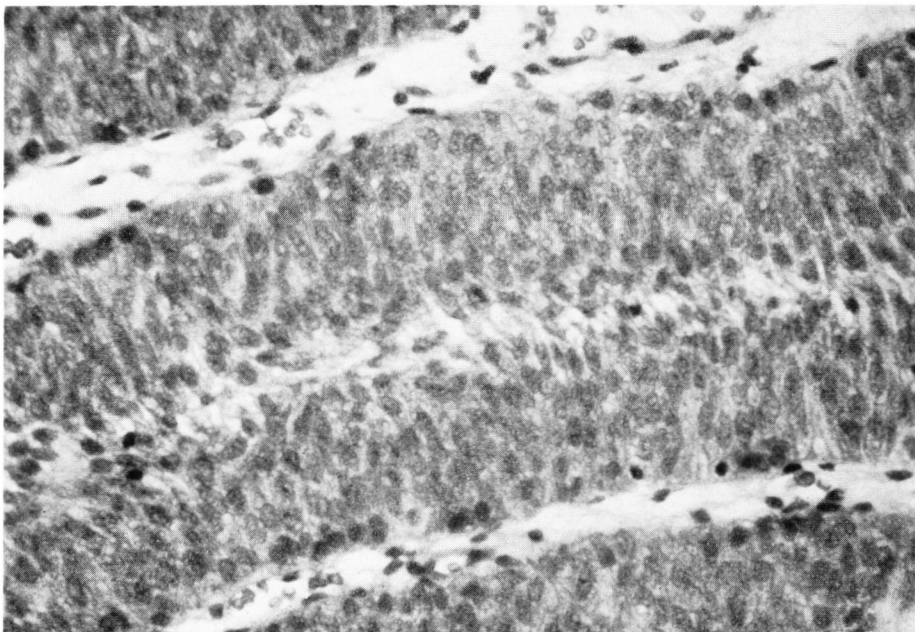


Fig. 2. 症 例 1

膀胱鏡所見：内尿道口7時あたりの前立腺部尿道から小指頭大、有茎性の乳頭状というよりむしろ棍棒状の、大きいポリープといった感じの腫瘍がみられた。

治療および経過：5月30日TURをおこなうと腫瘍基部は前立腺部尿道の proximal で表面平滑、毛細血管が透視されるポリープ状であった。術後4年間再発

はない。

病理組織学的所見：腫瘍表面の移行上皮の脱落はみられるが、きわめて粗な間質内に上皮索が複雑な屈曲を示して増殖している (Fig. 3)。上皮索の強拡大像では症例1と同様に上皮索の乳頭状増殖であるが、より結節性に集積する傾向がみられる。核異型は乏しく、

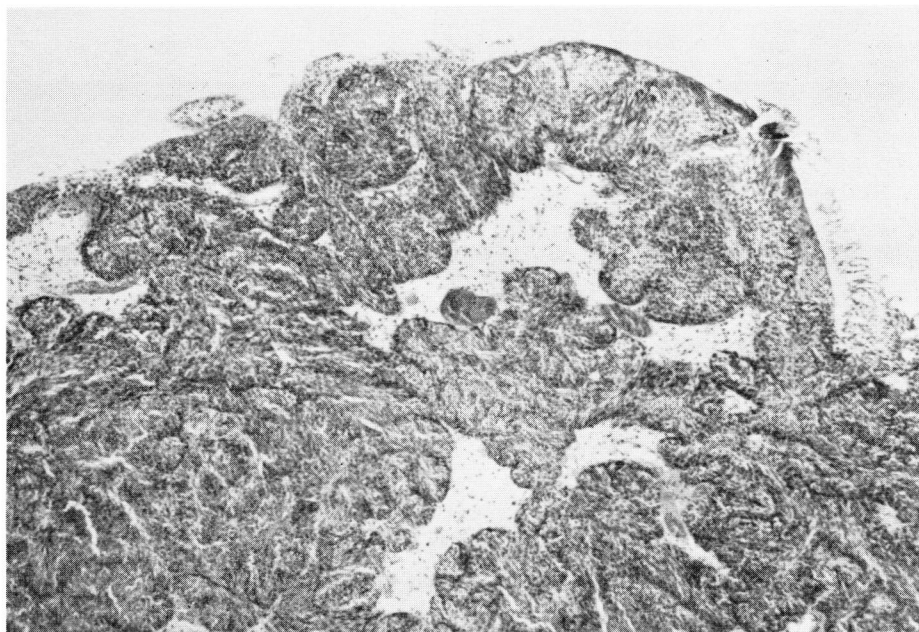


Fig. 3. 症 例 2

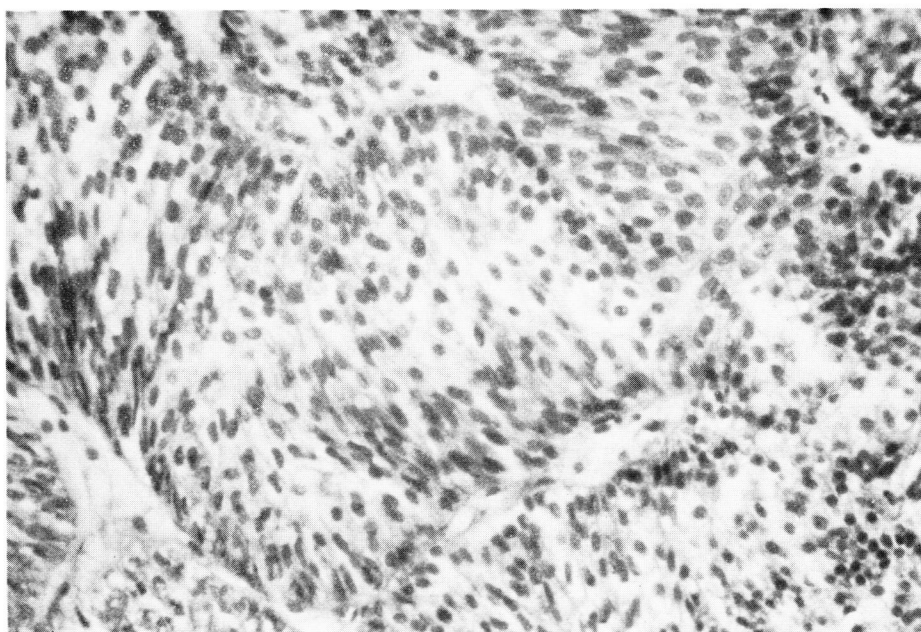


Fig. 4. 症 例 2

分裂像はない (Fig. 4).

症例 3：45歳，男。

初 診：1971年10月4日。

主 訴：尿線の中絶と残尿感。

現病歴：約2年前から上記症状があったが1回尿閉
となったため当科を受診した。

初診時尿所見：蛋白(－)，赤血球4～5コ/HPF，白血球(－)，細菌(－)。

膀胱鏡所見：内尿道口10時あたりからと思われる小指頭大，有茎性の，表面平滑で毛細血管の透視できるポリープ状の腫瘍を認めた。

治療および経過：10月14日 TUR をおこなうと腫瘍

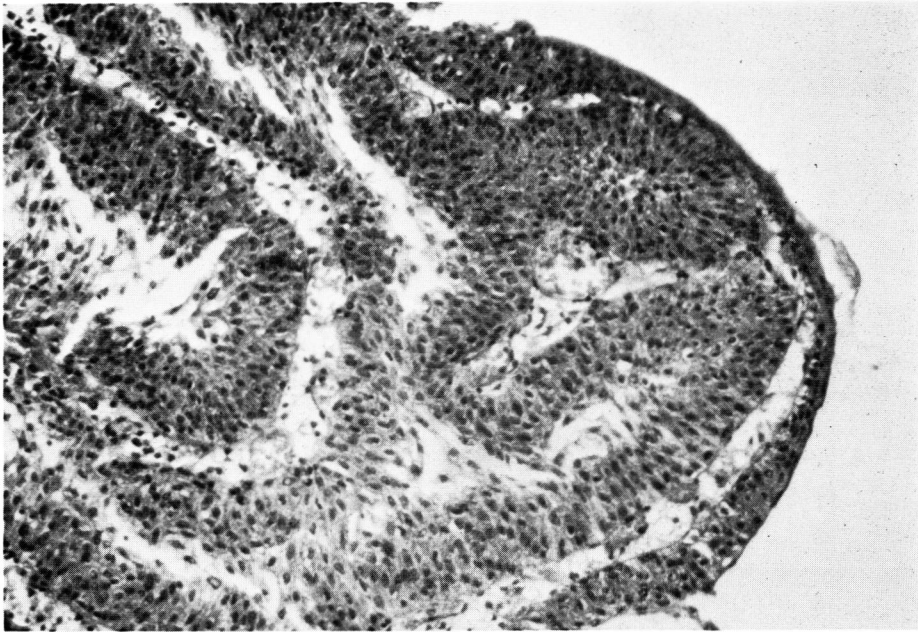


Fig. 5. 症 例 3

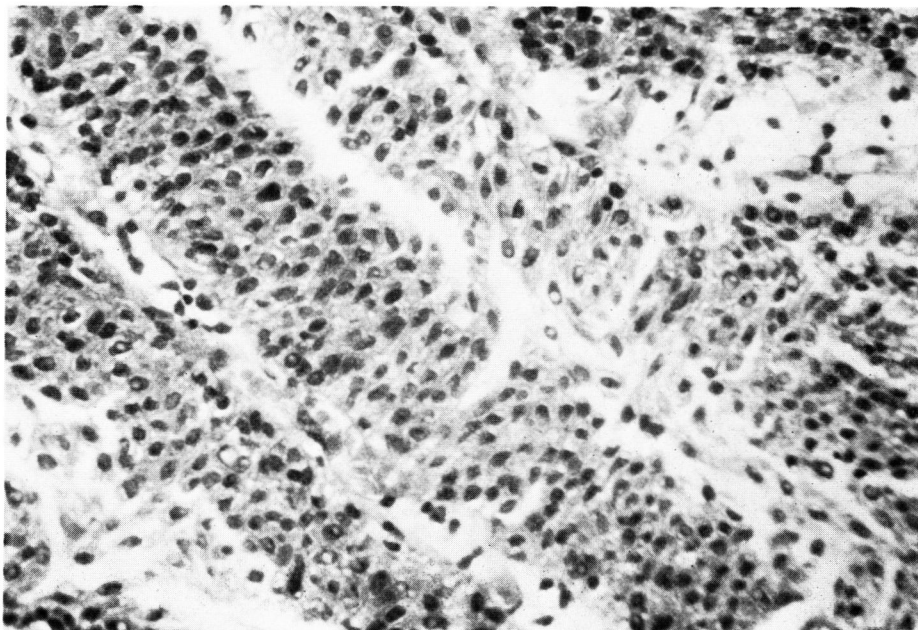


Fig. 6. 症 例 3

の基部は前立腺部尿道の proximal 7時あたりからの棍棒状、有茎性の腫瘍で切除、焼灼した。なお精丘の右側に小さい炎症性ポリープを認めたが焼灼のみで生検はおこなっていない。術後2年間は再発をみていないが、その後は不明である。

病理組織学的所見: 上記2症例と同様、表面は正常の移行上皮に覆われ、ほぼ同性質であるが軽い多層化を示す上皮索が疎な粘膜下結合組織に飄転して乳頭状増殖を示している。この例でも構成細胞に異型像乏しく、核分裂像もない (Fig. 5, 6)。

考 察

膀胱の inverted papilloma の最初の報告者である Potts ら¹⁾ は肉眼的には表面平滑、有茎性、卵円形の腫瘍で、病理組織学的にはほぼ正常の移行上皮で覆われるが、上皮索が間質内へ増殖する、つまり膀胱の乳頭腫の増殖形態とはまったく逆の、内嚢性の上皮増殖を示すことから inverted papilloma と呼称、その発生部位が膀胱頸部で一部に嚢胞状構造をみたことから三角部下腺 (Albarran's glands) の末端上皮細胞から発生し、それが増殖、突出する過程において有茎性腫瘍になったものでないかと想定した。

ついで3例を報告した Trites²⁾ は腫瘍の肉眼的形態は Potts らと同様であるけれども、うち2例までが前立腺部尿道から発生していたことから、三角部下腺の末端上皮細胞からとは限らないこと、また病理組織学的には普通の乳頭腫の単なる inverted variant にすぎず、副鼻腔の乳頭腫や脂漏性角化症の inverting variant に類似しているように思われると説明した。

その後、Henderson ら³⁾ は自験5例と文献上の13例、計18例を検討した結果 inverted papilloma の病理組織学的特徴として

- ①逆転構成
- ②表面は移行上皮で覆われている
- ③上皮細胞の異型性なし
- ④核分裂像はないか、あってもきわめて少ない
- ⑤microcyst (crypt) 形成
- ⑥ときに扁平上皮化生がみられる

の6点をあげ、proliferative cystitis からおこったものであろうとした。

また、Mayo Clinic 32年間 (1942~1974) の膀胱の炎症性疾患、良性腫瘍、Grade I の膀胱腫瘍に対する再検討をおこなった結果20例の inverted papilloma を見いだしたという DeMeester ら¹⁰⁾ は、①20例中18例までに腫瘍の辺縁または基部にリンパ球を主とした炎症性所見をみたこと、②20例中17例までに cystitis

glandularis, cystitis cystica, あるいは Brunn's nests がやはり腫瘍の辺縁や基部に認められたこと、③発生部位が膀胱頸部から三角部に多くみられたことから、本症は新生物というよりはむしろ chronic proliferative cystitis から進展したものでないかと推定している。

以上のように本症の発生要因については、①膀胱三角部下腺 (Albarran's glands) よりの過形成による良性腫瘍か (Potts ら¹⁾, Matz ら¹¹⁾, Trites²⁾, Hefter¹²⁾, 長船ら⁶⁾)、②膀胱の慢性増殖性炎症による産物 (Cummings¹³⁾, Henderson ら³⁾, DeMeester ら¹⁰⁾) であるか、今日なお本症の病理学的解釈については定説がなく、今後の検索にまたねばならない。しかし、臨床的立場からみると、①きわめて少数ではあるが核分裂像がみられた (長船ら⁶⁾)、②1例のみであるが再発 (悪性化像はない) がみられた (DeMeester ら¹⁰⁾)、③組織構築上からみた膀胱腫瘍の臨床病理学的分類から考えると本症は局所増殖性型のもっとも分化した型に位置づけられる (山田ら¹⁴⁾)、④本症の間質は規則正しく、かつきわめて粗である事実は一般の乳頭腫に比べて vital activity が低いというべきで、乳頭腫よりも良性の範疇に入れられる (長船ら⁶⁾)、など臨床的には良性の新生物として考える人が多いようである。しかしなお、Brunn's nests, cystitis cystica, あるいは cystitis glandularis との関連、移行も否定できず今後の検討が必要であろう。

自験3例は25歳、44歳および45歳の男子例であった。文献上の47例では40歳~60歳22例、60歳以上20例と中・高年齢層の男子に多くみられ、女性例は6例^{6, 10)}と少ない。若年者例は Assor ら¹⁵⁾ の26歳男子、稻田ら²⁾ の27歳男子、井口ら⁷⁾ の26歳男子の3例のみで、自験25歳がもっとも若い。本例は学生であり尿路感染の既往もなく、また病理組織学的にも炎症性変化は認められておらず増殖性炎症性産物とは考えがたい。また47例の発生部位では膀胱頸部21例、三角部16例、膀胱の側・後壁4例、前立腺部尿道5例および腎盂1例¹¹⁾で膀胱頸部、三角部に多くみられているが、自験3例では膀胱頸部1例、前立腺部尿道2例であった。

結 語

25歳男子 (文献上最若年者例) の血尿例で膀胱頸部の、44歳および45歳男子の排尿困難および中絶例での前立腺部尿道から発生した有茎性、棍棒状、表面平滑、毛細血管を透視できるポリープ状腫瘍例で、TUR の結果 inverted papilloma と判明した3症例を報告した。

文 献

- 1) Potts, I. F. & Hirst, E.: J. Urol., **90**: 175, 1963.
- 2) 稲田俊雄・落合京一郎：癌の臨床, **17**: 774, 1971.
- 3) 中村隆幸・ほか：泌尿紀要, **19**: 757, 1973.
- 4) 鈴木茂章・辻村俊策：日泌尿会誌, **66**: 50, **66**: 585, 1975.
- 5) 矢島息吹・久保泰徳：臨泌, **29**: 812, 1975.
- 6) 長船匡男・ほか：泌尿紀要, **22**: 635, 1976.
- 7) 井口正典・ほか：泌尿紀要, **23**: 173, 1977.
- 8) Trites, A.E.W.: J. Urol., **101**: 216, 1969.
- 9) Henderson, D. W., et al.: Virchows Arch. A. Path. Anat. and Histol., **366**: 177, 1975.
- 10) DeMeester, L. J., et al.: Cancer, **36**: 505, 1975.
- 11) Matz, L. R., et al.: Pathology, **6**: 37, 1974.
- 12) Hefter, L. G. & Young, I.S.: Urology, **5**: 688, 1975.
- 13) Cummings, R.: J. Path., **112**: 225, 1974.
- 14) 山田 喬・ほか：癌の臨床, **21**: 184, 1975, 第232回日本泌尿器科学会北海道地方会, 1976.
- 15) Assor, D. & Taylor, J. N.: J. Urol., **104**: 715, 1970.

(1977年10月17日受付)